

# 全国から9高校の高校生97名が参加 “SDGs放課後プロジェクト”実践報告

北 島 咲 江

〈キーワード〉 SDGs 持続可能 探究 プロジェクト活動

## はじめに

2021年5月は前年から始まった新型コロナウイルスの感染拡大が引き続き懸念されていた時期であり、高校生の活動は校内でも校外でも制限されざるを得なかった。こうした状況だからこそ高校生同士が交流できる場を作ろうと、広島崇徳高校、栃木宇都宮海星女子学院の先生方と協力し、「SDGs放課後プロジェクト」を立ち上げた。このプロジェクトは2021年9月～2022年3月までの半年間実施し、東京、神奈川、埼玉、栃木、新潟、奈良、広島の7都県の9つの高校から97名の高校生と4つの大学から39名の大学生が参加した。

新学習指導要領施行に伴う教科書の改訂でSDGsは教科書にも掲載されるようになった。『高等学校学習指導要領（平成30年告示）総則解説』の「改訂の経緯」の冒頭には、一人一人が「持続可能な社会の担い手」であることが期待されるとあり、学習指導要領総則そのものにも「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される」と明記されている<sup>(1)</sup>。こうした新学習指導要領の内容を受けて、教科書でもSDGsをテーマとした教材が掲載されるようになった。

昨今の各種メディアにおけるSDGsの登場率も著しく高い。各キー局は「サステナビリティ」宣言の下でSDGsキャンペーンを展開しており<sup>(2)</sup>、今やメディアからSDGsという言葉が聞かない日はないと言っても過言ではない。2022年6月にはNHKと民放キー局をはじめ、テレビ局、ラジオ局、オンラインメディア、新聞、出版社などが加盟する国連SDGメディア・コンパクトで、「国内130社以上のメディアが参加し、「1.5℃の約束—いまずぐ動こう、気温上昇を止めるために。」という国レベルでは世界初となるメディアの垣根を超えた共同キャンペーン」も行われたほど、日本のメディアにおけるSDGs熱は高い<sup>(3)</sup>。テレビだけでなく、2017年に始まった吉本興業の芸人たちによるSDGsキャンペーン<sup>(4)</sup>や、2020年から刊行された小学生向けの講談社SDGs図書シリーズ「おはなしSDGs」<sup>(5)</sup>やキティちゃんによるSDGsキャンペーン<sup>(6)</sup>の展開を見ると、現代の高校生は、小中学生の頃からSDGsに触れてきた世代だとも言える<sup>(7)</sup>。

SDGs ブームの中でその実体が伴わない SDGs ウォッシュ企業が現れる等、SDGs をめぐ  
る問題は尽きないが、良くも悪くも SDGs という言葉が人口に膾炙したことで、これまで  
充分には知られていなかった環境問題や社会が抱える構造的な問題が明るみに出た。また、  
SDGs という旗印を掲げることに社会的意義が読み込まれるようになったことで、この環境  
下で大人になる中高生が、社会問題に対する「モヤモヤ」を発信する際のハードルも下がっ  
た。今では高校生が企業にその中枢メンバーとして招聘されるほどだ<sup>(8)</sup>。今や SDGs は多  
様な人々がつながる契機を作る汎用性の高いスローガンとして機能することで、年齢を超え  
た〈タテ〉のつながりと、地域や所属を超えた〈ヨコ〉のつながりを生み出している。この〈つ  
ながり〉の醸成こそが、地球規模の問題群を前にした際に、解決の一步を踏み出すための基  
盤となり、未来の基盤を支える高校生の行動変容を促す契機となる。

今回の「SDGs 放課後プロジェクト」は、この効果的な〈つながり〉をつくることを目標に、  
コロナ禍で立ち上げられたプロジェクトである。高校生が自分の「モヤモヤ」を新たな仲間  
と共有し、その解決策を生み出す過程は、コロナ禍で他者への疑いが蔓延する社会から回復  
するための一步ともなり得ると考えた。以下、三校の教員が立ち上げた「SDGs 放課後プロジェ  
クト」について報告したい。

## 第1章 SDGs 放課後プロジェクト開講

初回は2021年9月15日（水）16：40にスタートした。活動は1時間程度とし、毎回  
SDGs やアントレプレナーシップを専門として活躍する講師陣による講義を30分程度行い、  
参加者はここで SDGs 知識や考え方等をインプットし、その後各グループに分かれたミー  
ティングを行って自身の考えをアウトプットするという方法をとった。

各グループが制作したプロジェクトは、3月の成果発表会において審査員の前で披露し、  
最優秀賞を受賞したグループには、SDGs ビジネススクール「Start SDGs」での授業を半年  
間無償で受講する権利を授与することとした。また、プロジェクトの全受講者には「Start  
SDGs」から修了証（図1）を授与することとした。「Start SDGs」とのコラボレーションに  
ついては、当プロジェクトを共に立ち上げた宇都宮海星女子学院高等学校の小野田氏に感謝  
申し上げたい。

参加者の募集にあたっては、各校でフライヤー（図2）  
を掲示または Google Classroom に掲載した。当初、  
参加校は本校と宇都宮海星女子学院高等学校（栃木）  
と崇徳高等学校（広島）だったが、最終的には、城  
北埼玉高等学校（埼玉）、東京横浜独逸学園（神奈川・  
インターナショナルスクール）、ドルトン東京学園（東



【図1】修了証

京)、奈良育英高等学校(奈良)、新潟青陵高等学校(新潟)、中央大学杉並高等学校(東京)の高校生および、中央大学、慶応義塾大学、東京大学、龍谷大学の大学生が参加した。

全10回のSDGs有識者による講義には、以下の方々が協力してくださった。この場を借りて感謝申し上げたい(所属・役職名は2021年当時)。

- ・井田徹治さん(共同通信社編集委員兼論説委員 環境・開発・エネルギー問題担当)
- ・林光洋先生(中央大学経済学部教授)
- ・阪田留菜さん(Fridays For Future Tokyo)
- ・大塚桃奈さん(BIG EYE COMPANY 上勝町ゼロ・ウェストセンター)
- ・山田晃一さん(OMC Power Private Limited、三井物産株式会社)
- ・中村寛樹先生(東京大学社会科学研究所准教授)
- ・清野聡子先生(九州大学大学院工学研究院 環境社会部門 生態工学研究室)
- ・種市慎太郎さん(IRENKA KOTAN 代表)
- ・的場太さん(ネスレ日本株式会社)
- ・熊野正樹先生(神戸大学産官学連携本部教授)
- ・横田浩一先生(慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授)
- ・山口由人さん(高校生起業家)

また、メディアリリースを作成し、各地域のメディアに発信したところ、奈良テレビ(<https://youtu.be/id9vgXFFrCU> 2021年9月15日)、奈良新聞(2021年9月15日)、下野新聞(2021年11月12日)、東京新聞(2021年11月27日)で取り上げられた

参加者には、「SDGsにおける関心ある分野」をGoogle Formを使って事前にヒアリングし、関心の高い社会課題を共有できる大学生または高校生とグループを作れるように工夫した。プロジェクト実施曜日については、数回にわたってGoogle Formを使った調査を行い、できるだけ多くの参加者が出席できる曜日を探った。各回の講義についてはアーカイブに残し、特設Webサイ

### SDGs 放課後プロジェクト

—探究力開発に向けた SDGs 実践ゼミ—

**何をやるの？**

①2021年9月から2022年3月まで、全国の高校生と大学生が参加して、企業・大学の協力を得ながら、半学期かけてSDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。プロジェクトチームは自由です。  
②広島、新潟、奈良、栃木、東京、神奈川、埼玉の高校生が、大学生と一緒に社会課題の解決に取り組めます。  
③各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。  
④プロジェクトの企画者には「修了証」も授与されます。コンペで優秀賞を獲得したチームには、SDGsビジネススクール「Start SDGs」への無償入学が奨励されます。

**いつやるの？**

開催日時：2021年9月15日(水)～2022年3月26日(土) 全12回  
 隔週水曜日に開催します。※水曜日が祝日の場合は、木曜日開催(裏面参照)  
 開催時間：各回16:40～17:40(18:00) 60分～80分を予定  
 実施方法：すべてオンラインにて実施します。  
 お問い合わせ：事務局のQRコードからエントリーできます。

【参加高校】(五十音順)  
 <中学校・高等学校>  
 宇都宮海星女子学院高等学校(栃木)  
 城北埼玉高等学校(埼玉) 南陽高等学校(広島)  
 中央大学杉並高等学校(東京) 中央大学附属高等学校(東京)  
 東京横浜法造学園(神奈川)インターナショナルスクール(東京)  
 ドルトン東京学園(東京)  
 奈良育英高等学校(奈良) 新潟青陵高等学校(新潟)

【協力】  
 中央大学経済学部/FIL 産官協カプログラム 林光洋研究室  
 龍谷大学、徳大大学を予定

参加ご希望の方はこちらへ ↓

【SDGs 放課後プロジェクトスケジュール(予定)】		内容
①	9/15(水) 16:40-17:40	基調講演：共同通信社編集委員兼論説委員 井田徹治さん、講師「産官協カプログラムの活用」 【活動】「SDGs」の理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。
②	9/29(水) 16:40-17:40	SDGs 講義①：中央大学経済学部教授 林光洋先生による講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
③	10/20(水) 16:40-17:40	SDGs 講義②：Fridays For Future Tokyo 代表 種市慎太郎先生による講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
④	11/4(水) 16:40-17:40	SDGs 講義③：ネスレ日本株式会社 的場太さんによる講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
⑤	11/18(水) 16:40-17:40	SDGs 講義④：慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授 熊野正樹先生による講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
⑥	12/15(水) 16:40-17:40	SDGs 講義⑤：龍谷大学経済学部/FIL 産官協カプログラム 林光洋研究室 講師による講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
冬休み		
⑦	1/12(水) 16:40-17:40	SDGs 講義⑥：共同通信社編集委員兼論説委員 井田徹治さんによる講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
⑧	1/26(水) 16:40-17:40	SDGs 講義⑦：産官協カプログラム 林光洋先生による講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
⑨	2/2(水) 16:40-17:40	SDGs 講義⑧：慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授 熊野正樹先生による講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
⑩	2/24(水) 16:40-17:40	SDGs 講義⑨：龍谷大学経済学部/FIL 産官協カプログラム 林光洋研究室 講師による講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
⑪	3/17(水) 16:40-17:40	SDGs 講義⑩：産官協カプログラム 林光洋研究室 講師による講義 【活動】SDGsの理解と社会課題解決のアイデア創発を目的とした探究型のプロジェクトを行います。 【活動】各大学の教授陣やSDGs実践者による講義・講義を無償で受講できます。
⑫	3/26(土) 13:00-13:00	コンペティション 審査員による講義、優秀チーム決定

【図2】SDGs 放課後プロジェクトフライヤー

各回60分または80分を予定しております。(講義30分/活動30～50分)  
 ◎SDGs 講義は、有識者やSDGsビジネスの実践者からのオンライン講義です。  
 【問い合わせ先】SDGs 放課後プロジェクト事務局 [sdgs@imukyoku@gmail.com](mailto:sdgs@imukyoku@gmail.com)

トからいつでも視聴可能とし、グループのミーティングについてはグループメンバーで日時を決めて実施できることとした。それぞれの学校や大学の予定が異なるため、出席できない日にも講義を閲覧し、ミーティングに参加できるようなシステムを作った。グループメンバーの構成にあたっては、学校間の交流をはかるため、できる限り異なる学校の生徒同士でグループを組めるようにした。結果、25グループ（各グループ5～6名）が構成されたのである。

## 第2章 プロジェクトを実施・運営する上での困難

2021年8月から月に1～2回の頻度で各校の先生方と打ち合わせを重ねる中で、複数の高校が一つの取り組みを行う上での様々な問題が浮上した。そのうちの一つは、生徒がオンラインで参加する方法だ。多くの学校では生徒が放課後の教室に集まり、学校のネットワークを利用してオンラインで参加していたため、各校で許可された Google Meet を使用することになった。Google Meet より Zoomの方が通信時の負荷が軽いという話も出たが、当時参加校の多くでは校内での Zoom 利用が許可されていなかった。結局、9月15日の初回は Google Meet を使用したが、設定や通信上の様々な困難が生じる結果となり、2回目からは各校が校内の調整を図って Zoom を利用することになった。

上述の他にも、知らない高校生同士がプロジェクトを行う上での困難があった。たとえば、半年間にわたるグループ活動においてモチベーションを維持する上での苦勞である。高校生と大学生は、東京、神奈川、埼玉、栃木、新潟、奈良、広島と様々な地域から参加しており、各地域における学校や大学の忙しさが異なる。学校によっては定期テストや学校行事で参加者全員が活動に参加できない日もあった。これに追い打ちをかけたのが、新型コロナウイルス流行による休校や学年・学級閉鎖だ。放課後に学校から参加していた生徒全員が参加できなくなったこともあった。

さらに、様々な学校から様々な学年の生徒が参加していたため、それぞれの参加動機が異なり、モチベーションの維持が難しくなることがあった。参加者は、SDGsを学びたいだけでなく、公募型推薦対策になるとの期待から参加していたり、SDGsの波に乗って起業することを念頭に参加していたりと、そのモチベーションは様々だった。そのため、モチベーションのすれ違いから、一つのプロジェクト制作に向かえないケースが出てきたのである。加えて、探究活動の進め方においても、すでに学校全体で探究授業に取り組んでいる学校がある一方、当プロジェクトが探究学習を始める契機となった学校もあり、生徒の探究学習に対する慣れにも差があった。

また、この半年間に、高校生や大学生から相談窓口や各校の教員に寄せられた相談の内容は、ほぼすべてが人間関係に関する内容だった。「Zoom ミーティングで意見を求めても、誰も何も言わない」「LINE を使ったミーティング時に誰も顔出ししないので聞いているのか

わからない」「自分ばかりが働いていて、他のメンバーが協力してくれない」等々だ。こうした訴えが出てきた理由の一つには、完全オンライン開催だった点が挙げられる。全国どこにいてもミーティングを開催できるという利点がある一方、対面での開催に比べて各自に責任感が芽生えにくい、話の輪に入りにくい、発言のタイミングがはかりづらいというオンラインならではの問題があった。

各地域および各大学や高校から様々な人々が集ったゆえに、上述した困難が生まれたわけだが、考えてみればこれこそが SDGs 的チャレンジなのだとも言える。SDGs では、国も属性も宗教も異なる人々が、この先も人間が生きていくことのできる地球環境を何とか維持していくために、地球規模の 17 のゴールを同時に解決していくことが求められる。リミットは 2030 年と間近である。人々が、それぞれの社会的立場においてその変革の責任の担い手となれば話は早いですが、人々はあらゆる点において多様なことから、目標とする変化は簡単にはやっこない。行動しようと集まる人々もまた、たとえ同種の志を持っていても多種多様な人々であり、多種多様な人々がともに SDGs という多岐にわたる分野の活動を続けていくために話し合い、折り合いをつけながら決着点を探していく時間は、時にストレスフルな時間となる。当プロジェクトに参加したメンバーは皆 SDGs を学ぶ意欲がある若者たちという点で共通していたが、SDGs という活動をどのように捉えるか、その距離は異なっていた。その結果、「話し合う」「折り合いをつける」といったいわゆる〈コスバ〉と〈タイパ〉の悪い活動や活動動機の違いにストレスを感じて、途中離脱した参加者もいた。だが、多くの高校生や大学生は最後まで根気強く活動し、その感想からは、多くの学びを持ち帰ったことがわかる。

当初結成された 25 チームの内、複数のチームから脱退者は出たものの、最後の成果発表会まで 25 チームが探究を継続できた。5 人で結成したグループから 3 名が脱退したグループもあったが、残った 2 名を各校の教員がフォローしながら成果発表会までこぎつけた。

### 第 3 章 成果発表会での探究結果

成果発表会も間近となり、各校から参加した教員 9 名が、それぞれの担当グループを決めて助言する場を数回作った。また、審査項目をあらかじめ高校生や大学生と共有し、求められるプレゼンテーションについての理解を促した。審査項目は以下である。

#### (1) 課題設定力

##### ①課題の重要性

各チームが設定した課題は「いま」取り組む必要性の高い、適切なものであるか。

##### ②着眼点の独創性

課題の着眼点は独創的（斬新）か。また、この SDGs 放課後プロジェクトならではの新

規性（中高大学生の連携・文理融合・地域連携・多様な背景・オンラインでの開催等の要素）が影響していることが伺えるか。

## (2) 探究力

- ①課題に対して適切かつ具体的な（実現可能性の高い）解決方法が提示されているか。
- ②アプローチに独創性（単なる前例の踏襲ではなく、斬新な方法）があるか。
- ③課題を自分事としているか。課題解決を目指して適切な情報収集（専門家へのインタビュー等も含む）をできているか。自分たちなりの解決を提示できたか。

## (3) プレゼンする力

わかりやすいプレゼンだったか（内容を提示する順序、説明の仕方、声の出し方、スライドのデザイン等）。

## (4) 発表者の熱意

自分の手で社会をよりよい方向に変えていこうとする意欲が見えるか。

以上4項目のうち、各カテゴリーは原則3点満点とし、当プロジェクトの趣旨が最も反映される(1)②着眼点の独創性、(2)②アプローチの独創性、そして参加者が最も取り組みやすい(4)発表者の熱意を4点満点とした。また、参加者である中高生・大学生も「着眼点が独創的!」「将来実現できそう!」「プレゼンがうまい!」「熱意があった!」以上4項目について、1人1票を投じられる仕組みを作った。

審査員には、以下4名の先生方にご協力いただいた（所属・役職名は2021年当時）。

- ・井田徹治さん（共同通信社編集委員兼論説委員 環境・開発・エネルギー問題担当）
- ・林光洋先生（中央大学経済学部教授）
- ・横田浩一先生（慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授）
- ・黒岩賢太郎さん（株式会社グローバルイノベーションズ代表取締役、ビジネススクール Start SDGs 主催）

成果発表会（図3）は、2022年3月26日（土）13時～15時に開催し、全25グループが半年間かけて作り上げたプロジェクトを発表した。グループ数が多かったため、最初にZoomを【グループA】の1～13班と【グループB】の14～25班に分けて、審査員も2名ずつに分かれて、各グループにおける優秀賞（1グループ）を決定した。その後、各グループで優秀賞を受賞した2グループが参加者全員と4人の審査員の前で再度発表し、最優秀賞を決定し

た。オンライン開催における投票のシステム作りにおいては、本校の理科教諭である元山敬太先生が尽力くださった。この場を借りて御礼申し上げたい。

成果発表会での発表テーマは、主に「環境」「教育」「食（飢餓）」「その他」に分かれた。下記に、発表テーマ例を挙げる。



【図3】 成果発表会の様子

「環境」

- ・ My ボトル式自動販売機設置案
- ・ わたしは私の好きを着る～地球を考えたおしゃれをしよう～
- ・ 海洋プラスチック削減へ向けて
- ・ The Ultimate Solution of Marine Problem  
～Let's get back clean sea～
- ・ アプリ「ポイヒロ」ゴミ拾いのイメージを変える

「教育」

- ・ 発展途上国における知識不足による子供の健康被害の解決
- ・ 日本の貧困と教育の格差
- ・ エチオピアの子どもたちへ絵本と五十音表を届ける取り組み
- ・ サブサハラ・アフリカの学校環境改善に向けた寄付活動
- ・ 新たなコミュニティの提案—教育格差・貧困の改善に向けて—
- ・ ICT教育を効果的に行うには—ICT教育の格差をなくすために—
- ・ 教科書から始める教育環境づくり～レンタルシステムと自作教科書の作成～
- ・ LGBT+ なぜ性教育が必要なのか～他国と比べて遅れた性教育～
- ・ アフリカ地域の人々に対する教育と医療の支援
- ・ 世界から教育格差を0にする PedAGogy～南アフリカのリンポポ州の全高校生に大学という選択を～

「食（飢餓）」

- ・ 人類みんなでモグモグ大作戦

「その他」

- ・ あしたの人生ゲーム—社会問題への入り口—
- ・ 若者と政治—若者の投票率が低い理由—

・ Make you Way—学生妊娠をした女性へ未来のためのチャンス—

最優秀賞は、グループ25「世界から教育格差を0にする PedAGogy ~南アフリカのリンボポ州の全高校生に大学という選択を~」が受賞した(図4)。「学生総合アテンドシステム」と銘打ったこのプロジェクトは、南アフリカのリンボポ州における若者の状況に焦点を当て、経済的事由により教育の継続を諦めざるを得ない若者を支援する仕組みを提案したものである。

2021年度は、コロナ禍で家庭の経済状況が急変し、大学での学習を継続できない若者がメディアに取り上げられていた時期だ。この発表に至った高校生と大学生にとって南アフリカの若者の現状は他人事ではなかったのだと思われる。グラミン銀行による無担保少額融資「マイクロクレジット」のように、社会的信用が低くとも、その未来に向けて融資を受けられるシステムは、コロナ禍で格差が広がり続けるこの社会では喫緊に必要とされるものであり、この発表の現実社会へ与えるインパクトの大きさや実現性が高く評価された。審査員の先生方からは、「すぐにでも実現できそう」「目標も仕組みも明確で現実的」といったコメントを頂き、最優秀賞の受賞に至った。

発表テーマを概観すると、「教育」を支えるプロジェクトを提案したグループが多かったことがわかる。教育関係のプロジェクトを扱ったグループは、25グループ中10グループであった。ここからは、高校生・大学生が、これまでに受けてきた教育の内容や構造に改善すべき点を見出していることがわかる。

優秀賞は、「エチオピアの子どもたちへ絵本と

【図4】グループ25のプレゼンテーション資料

五十音表を届ける取り組み」が受賞した。このグループではフェアトレードコーヒーを販売する企業に協力を依頼し、五十音表を送る取り組みの実現を取りつけていた。その実行力が評価されたのである。他に、SDGsを周知するツールとして、お金を稼ぐことを目標としない人生ゲームの提案等、様々なテーマでの発表があった。審査員の先生方からは、「人生ゲームを作るという発想は若い人ならでは。思いもよらない提案だった」等、驚きと称賛の言葉とともに、様々なアドバイスを頂いた。

最優秀賞を受賞したグループ25には、ビジネススクール Start SDGs の授業を半年間無償で受講する権利が授与された。また、参加者には Start SDGs より、修了証が授与された。

## おわりに

プロジェクト活動を終えて、受講者からは以下のとおり様々な感想が寄せられた。

- ・最初は緊張したけど、話し合いをしていくうちに慣れてきて楽しく話せたことがとても嬉しかったです。年齢関係なくみんな平等に話をしたり、質問しあって絆を深めあったりできてコミュニケーションってすごいなと改めて思いました。
- ・半年間、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。様々な講義を受けたり、チームで協力したり、どの活動も自分を成長させてくれました。ギリギリまで調整を続け、皆で作りに来て来たプレゼンが良い結果となって返ってきて、本当に嬉しいです。また、互いに高め合える良いチームと出会えたことも、一生の宝物です。このような機会をくださり、本当にありがとうございます。
- ・オンラインで多くの地域の人と繋がり、意見を交換できて嬉しかった。
- ・半年間グループのみんなて話し合いを重ねて、個人的にはとても良いプレゼンテーションができたと思いました。とても達成感があります。
- ・世界の問題を解決するためにはどうすればいいかを具体的に考えることが難しいと思った。
- ・これが達成感か…！という感じです。会ったこともない人たちと、半年間ほぼ毎週 zoom でミーティングをしました。他愛のない話から真面目な話まで全てをしてきたメンバーと発表をやりきった時は、あっという間に終わってしまったな～と思いましたが、頑張ったぞ！という気持ち大きいです。
- ・今回の活動が無ければ出会えなかった新しい出会いがとても新鮮でした。
- ・他校の人と関わることができたので他の視点を持つことができた。
- ・講義やプレゼンまでの準備等のグループワークは、今後の人生に役立つ経験でした。
- ・他校の方との交流が、とても刺激的で有意義な物となりました。
- ・時期的にしんどかった部分もあったけど、同年代の色々な考えを聞けるきっかけになって、とても財産になりました！
- ・グループのみんなと1つのアイデアを深めていくことができてとても楽しかったし、達成感が凄いです。
- ・これから経験のできないようなことをさせて貰えて楽しかったです。
- ・全然アクションできなかったことが心残り。調べてまとめて解決策出すことは誰でもできるし、それだと何も解決しないから解決させるために行動するところまでがこのプロジェクトの意味だったはずなのに、ただの調べ学習になってしまった。
- ・これからの人生に活かせる経験ができました。特に講演での数々の役に立つ話を聞けてとても嬉しく、楽しかったです。なかなか学校生活だけでは経験しきれないことができたので感謝しています。

- ・高校生から多くの刺激をもらい、学ぶことができました。高校生と関わる機会はあまりなかったため、高校生視点の新鮮な意見を多く聞くことができ、勉強になりました。
- ・SDGsに関して調査をする過程で、自分の考えを深めるきっかけになり有意義だった。期間中には解決案を実行できなかったのが惜しいので、今後実行に移していきたいと思う。
- ・自分より若い学生達が目標に向けて学習を進める姿に感銘を受けました。とてもいい経験になりました。
- ・地域も学校も違うメンバーと1からプロジェクトを立ち上げるのは、意思の疎通が難しかったりとやはり大変なことも多かった。しかししかしその分、プロジェクトが完成していくにつれて大きな達成感を得られた。SDGs関連の仕事において活躍している方々のお話を聞いたり、インタビューをしたり、プロジェクトを完成させるという1つの目標に向かってメンバーで協力し合ったりと、普通の高校生では体験できないようなことが沢山できてとても面白かった。また私たちの班ではインタビューをきっかけに、まだ初期段階だがプロジェクトを実現させることが出来たり、発表会で2つも受賞でき、本当に良かった。
- ・会ったこともない方たちと協力してお互いにできたりできなかったりするところをカバーして作ることができました。ちょうど部活の遠征などかぶって参加できなかった時もカバーしてくれました。
- ・学んだことを活かして行動に移すことの難しさを学ぶことができました。私はもともと社会問題に対する関心が強く、ずっと何かしたいと思っていました。ただ、中学生の時は学校や受験勉強、習い事で忙しく結局ただ「学ぶだけ」でした。しかし、今回学ぶと同時にどうすれば自分の力でこの問題を解決へと導くことができるのかを一生懸命考えることができました。何時間もそして何か月も同じチームになったメンバーとどうしたら海洋汚染を止めることができるかを考えました。海洋環境について述べたインターネットサイトや本は読みつくしたといっても過言でないほど学びました。しかし、お金のことや実現性を考える前に、そもそもアイデアが思いつかない、課題が多すぎるという問題に直面しました。世界中の賢人がずっと考えてきた問題を素人である私たちが解決できるはずはありませんでした。しかし、私たちは強い関心と興味、使命感、柔軟な発想力に満ち溢れていました。「ゴミ拾いをする」という今までボランティアでやっていたことが将来的に海を守ることにつながるということに気が付いた時、私たちのゴールは見えました。お互い忙しい中、時間を見つけて10時過ぎまで議論したこともありました。優秀賞に輝いたり、4つの賞を頂いたりすることはできませんでしたが、とても有意義な半年間を過ごすことができました。また、このプロジェクトを通して、知り合うことのできた大学生の方を通じて、北九州市が開催する「海のロボットコンテスト」に司会として参加させていただきました。ここでは本当に海ゴミ問題に関心のある生徒、企業の方と直接意見をぶつけることができ、本当に有意義に過ごすことができました。このプロジェクトを通じて、今まで「学ぶだけ」だった私が「自分事としてとらえ自分で解決策を考える」ことのできる人間になりました。学びを享受しているだけでは、何も活躍することはできないし、世界は変わっていけないと思います。このような学校や年齢の垣根を越えて、ただ、地球をもっとより良い場所にしたいと願う人と議論を重ねて自分たちなりの解決策を探っていくことのできるこのプロジェクトに参加することができて本当に良かったです。
- ・まず、今回優勝という結果に終わったことをありがたく思うと同時に、チームと一緒に活動した先輩方はもちろん、興味深い講義で的確なアドバイスをいただいた教授並びに先生方や、コンペティションの直前にフィードバックをいただいた先生方のお力添えに深く感謝しております。この半年間で幾多の難局を経て完成した今回のプレゼン(4分という短い時間での)は僕のそしてチームとしての宝物となりました。また、今回は先輩たちに助けられた場面がたくさんありました。これからは、この活動で培った経験を糧に自分自身の力で、何かを成し遂げたいと強く思いました。そして、今後は僕が先輩という立場で、後輩をアドバイス、アシストしていきたいです。
- ・班での活動を通して様々なことを学ぶことができた。SDGsの知識を増やすことが出来た。また色々な先生からの講義でもこんな視点があるんだと気付かされたり、自分と同年くらいの人々が起業したりしているのを見てすごくやる気を貰えた。

- ・チーム 11 として、独創的であると、参加者からそして審査員の先生方から思っただけで、とても嬉しかったです。たいそうなコメントはできませんが、少しでも、参加できてよかったのかな、と思えました。ここまで行動力や、いろいろな知識を持っている人に接したことが無かったので、とても刺激的でした。
- ・他校の生徒や大学生と話す機会がたくさんあり良かったです。また、自分があまり関心がなかった SDGs の分野も他班の進行状況発表などで、知ることができるので楽しかったです。
- ・全く関わったことのないメンバーと一緒に活動できて新しい刺激や違う生活習慣を学べて良かったです。
- ・様々な専門の、さまざまな年代の人から多くのことを学べる場だったと感じた。また、同年代の人にこういうものに興味がある人が少なかったため、いつもはできない体験や話し合いができた。卒業と同時に忙しくなり、参加できない時間が増えてしまったことが少々残念だったが、もし大学でも機会があったら参加してみたい。
- ・SDGs に漠然とした興味があっただけで参加を決めたが、同じ意思のある方々と意見を出し合ったり現状に向き合ったりしてより具体的に何ができるかを考えることができました。私たちは自分や小さな身の回りだけでなく、空間的にも時間的にも広く考えて行動をする必要があると思います。このようなプロジェクトを学校が主催してくださり、思う存分に行動が始められました。またこの度プレゼンテーションで一位を獲得することができ嬉しかったです。今後の活動につなげていきたいです。
- ・少し終わったのが残念です。やっとチームとの話し合いに参加しやすくなっていたところに終わってしまいました。
- ・時間帯が合わなくて、苦戦した部分はあったが、全体的に勉強になった。
- ・中々に有益な時間だった
- ・賞は取れませんでした、なかなか有益な時間でした
- ・他の班の刺激的で面白い発表が聞けて勉強になった
- ・全国の学生を通し、新しい発見や考えを知ることができてよかった
- ・グループでの活動は思ったよりも難しかったけれど（まとまらなかったから 😊）、終わって寂しい感じはある
- ・今までこれほど大きなプロジェクトに参加したことがないのでいい経験になりました。チームの中でも最初はお互いあまり知り合っていない状態でテーマを決めて、それに取り組みながら始めたんですが、最終的には仲良くなって非常に面白くて良い体験でした。そうして何より自分はいろんな凄いやつらの話を聞いて世界の事を知ってこれからも SDGs に取り組みながら生きていきたいと思っています。
- ・他学校との交流をすることで色々な意見が出し合えたと思います。国や学校一つ一つの違う考え方や意見をあらためて知ることができました。色々な年が近い人たちとの交流で楽しく、これから役立てることができる活動を行えるとてもいい機会でした。

初めての取り組みだったが、他校の先生方との共同プロジェクトを行うことができ、大変勉強になった。当プロジェクトをともに立ち上げ、運営して下さった各校の先生方および大学生メンター募集にご協力下さった先生方、当活動に理解を示して下さい本校の管理職の先生方に心から感謝申し上げたい。当プロジェクトのような活動をハブとして、各地で〈点〉として実践されている SDGs 活動が〈線〉となり〈面〉となっていくことで、社会を動かす機動力になっていくことを期待したい。

- 
- (1) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』
- (2) フジテレビ・BSフジ・ニッポン放送はお笑い芸人EXITをアンバサダーにした3波連合プロジェクト「♡楽しくアクション！SDGs」、日本テレビでは「Good For the Planet グップラ」キャンペーン、テレビ東京では「SDGs ウイークエンド「みんなと - テレビ東京」」など、各局でSDGsキャンペーンが展開されている。「フジテレビ・BSフジ・ニッポン放送 - 楽しくアクション！SDGs」  
[https://www.fujimediahd.co.jp/sdgs/enjoyaction\\_sdgs/](https://www.fujimediahd.co.jp/sdgs/enjoyaction_sdgs/)（2023年2月2日取得）  
「Good For the Planet グップラ」<https://www.ntv.co.jp/goodfortheplanet>（2023年2月2日取得）  
「SDGs ウイークエンド「みんなと - テレビ東京」」<https://www.tv-tokyo.co.jp/sdgsweekend2023/>（2023年2月2日取得）
- (3) 国際連合広報センター [https://www.unic.or.jp/news\\_press/info/44283/](https://www.unic.or.jp/news_press/info/44283/)（2023年2月2日取得）
- (4) 「“吉本興業と国連”が地球を守るためのコンビ結成！」吉本興業によるSDGsキャンペーンは2017年からスタートしている。[https://www.unic.or.jp/news\\_press/info/26262/](https://www.unic.or.jp/news_press/info/26262/)（2023年2月2日取得）
- (5) 「コクリコ」17のゴールそれぞれに関連した17冊の児童書。2020年に刊行。  
<https://cocreco.kodansha.co.jp/cocreco/general/education/kJR2t>（2023年2月2日取得）
- (6) 「ハローキティ #HelloSDGs」<https://www.hellosdgs.com/>（2023年2月2日取得）
- (7) 高校生を含むZ世代において社会的課題の解決に興味関心を持つ層は2022年8月で56.8%いたが、社会的課題解決のために「すでに取り組んでいることがある」という回答は9.3%にすぎない（SHIBUYA109 lab. が2022年8月に実施した、外部調査パネルによるWEB調査と独自ネットワークによるインタビュー。対象は15-24歳のZ世代。「Z世代のSDGsと消費に関する意識調査」<https://shibuya109lab.jp/article/220920.html>（2022年2月1日取得））。
- また、中高生においてSDGsの取り組みの情報源は、「学校の授業（81%）、テレビ番組（46%）、テレビCM（24%）、WEBニュース（23%）」であり、SDGsの取り組みを知るきっかけになっている人は、「学校の先生（52%）、タレント（23%）、インフルエンサー（13%）」であることから、学校の放課後を使ったSDGsの取り組みは、SDGsに関心のある中高生の行動変容を促す上で効果的だったと考えられる（マイナビティーンズラボ「若年層のSDGsへの意識は高い？認知・関心度や学習方法を調査！」  
[https://teenslab.mynavi.jp/column/research\\_thinksdgs/](https://teenslab.mynavi.jp/column/research_thinksdgs/)（2023年2月2日取得））。
- (8) 株式会社ユーグレナは、2019年から18歳以下のCFO（Chief Future Officer）を起用しており、商品開発だけでなく、定款の事業目的をSDGsに則したものに変更する際の監修など、多岐にわたる提言や活動を行っている。<https://www.euglena.jp/news/20220418-2/>（2023年2月2日取得）